

## 第6章 ロシアタンカー重油流出事故後の環境の状況

### 第1節 水質環境調査

#### 1 調査概要

平成9年1月のロシアタンカー重油流出事故に伴う長期的な環境影響を把握・評価するため、平成9年4月から平成10年3月にかけて、沿岸水域、沖合水域の水質調査及び沿岸域の底質調査を実施した。

#### 2 調査内容

	調査項目	調査場所	調査月
水質	pH、塩素量、DO、COD、SS、全窒素、全磷、油分等（ノルマルヘキサン抽出物質）、ベンゼン	沿岸水質（21地点） 気比浜、津居山港内、青井浜、竹野浜、弁天浜、大浦、切浜、浜須井、安木浜、佐津、無南垣、柴山、今子浜、香住浜、三田浜、余部、田井ノ浜、浜坂、塩谷浜、諸寄第二、居組	9年4月～12月 (8回)
		沖合水域（6地点） 津居山港沖、冠島沖、浜須井沖、無南垣沖、余部沖、鬼門崎沖	9年4月～10月3日 (8回)
底質	泥質、色相、臭気、含水率、強熱減量、硫化物、COD、油分等（ノルマルヘキサン抽出物質）	沿岸水域（19地点） 気比浜、青井浜、竹野浜、弁天浜、大浦、切浜、浜須井、安木浜、佐津、無南垣、柴山、今子浜、香住浜、三田浜、田井ノ浜、浜坂、塩谷浜、諸寄第二、居組	9年4月～12月 (8回)

#### 3 調査結果

測定したいずれの項目からも水質及び底質環境への影響は特に認められなかった。  
(参考：環境基準との比較について)

ア 油分等（ノルマルヘキサン抽出物質）及びベンゼンについては、環境基準を達成していた。

イ CODについては、沿岸水域の一部（柴山）で環境基準を若干超過したが、夏期に海藻の漂着の影響を受けたものであると考えられる。

ウ PHについては、沿岸水域の一部（大浦、無南垣）で環境基準を若干超過したが、調査時において特に原因となるものはみられなかった。

エ DOについては、沿岸水域の一部（竹野浜、三田浜、居組）で環境基準を若

干下回ったが、夏期に水温が高くなり、溶解度が低下したためと考えられる。

なお、上記のpH、COD、DOについては、近年の常時監視結果や海水浴場調査結果と比較して、変動の範囲内と考えられ、環境への影響はないものと考えられる。

(参考：油膜の確認について)

4月の調査では、沿岸水域の一部（無南垣）で油膜がわずかに確認されたが、それ以外の地点及びそれ以降の調査においては、油膜は確認されなかった。